

鯉淵学園の思い出

今回の鯉淵学園の思い出は、加藤 整さん(10期生)が引き続き書いてくださいました。毎号のように鯉淵学園時代の思い出を詳しく書いていただき心より感謝申し上げます。

お互いの“絆”を大切にしよう

思いつくままに綴ってきた鯉淵学園の思い出ですが、そろそろ閉じなければなりません。鯉淵学園で私が特に印象深く思い出おこすことは、まず第一に「師」に恵まれたことです。当時(昭和二十年後半から三十年前半)は、先生方の多くは校内の社宅に居を構えておられました。これは学生にとって誠に好都合で、しばしば訪問して教室では出来ないお話を聞いたり、時には先生の方から声をかけていただいて出掛けることがしばしばで、これが生きた勉強になったように思います。食糧事情のよくない時代で、夜の訪問など先生方には迷惑なことであったと思いますが、こんなことは一般の大学などでは考えられないことではなかったかと思えます。この関係が卒業後も大きな財産として生きていることは間違いありません。教育指導の場は教室だけではないのです。宮島三男先生が、鯉淵学園の学生は、入学時にはさほどはなくても、卒業時にはよしやるぞという気構えをもって帰っていつてくれるのが嬉しいと言われていましたが、実践を重視した教育の神髄はそんなところにあったのかも知れません。

第二は、お互いの「絆(きずな)」を大切にしていける精神を育んだことです。同期生はもちろん先輩・後輩分け隔てなく交流して身に付けた知識技能の意味は大きなものがあつたと思えます。われわれの学生時代は、夏休みの期間を利用して友人の郷里を訪ね、実習を通じてその地方の農業に直接触れる人が多かったと思えます。わが家にも、田植えの時期に福島県の友人二人が、また秋の稲刈りには群馬県の友人二人が来て、それぞれ郷里の農業とは異なった実務を体験してくれました。こんなことが単なる技術の習得ではないものを得る機会になったのではないのでしょうか。

第三には、社会生活における基本ともいふべき「自由」について学んだことです。小出学園長は入学式の式辞で、必ず「自由」の重要性を説かれました。「自由は我がままとは違う。先ず他へ義務を果たして他の自由を充分尊重すること」だと言われています。私たちはこのことを全寮生活を通じて学びました。

ところで、皆さんは“ベイラント現象”と言うことを

ご存じでしょうか。十六世紀後半にオランダがスペインからの独立戦争を戦っているとき、敵方のスペインに武器を売って非難された商人ベイラントの、倫理性のない金もうけ主義を言ったものだそうです。彼は金銭だけを価値基準としていました。こっそり自軍を抜け出して敵のスペイン軍に武器を売ったのです。見つかって非難されると、わが国では営利の自由が許されている、なにが悪いと開き直ったのだそうです。

また、大塚久雄氏は、人間の行動は利害関係によって決まる。しかし、何が人間の行動としてふさわしいかを決めるのは理念(思想)であると、言っておられます。自由は規律があつて始めて機能する。社会生活に必要なことは「自由と規律」でしょう。

最後に、長い間雑文の掲載をお許しくださった福井編集長に心から感謝を申し上げますとともに、これに目を通してくださった同窓生の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

加藤 整(10期生)

私は昭和28年4月から33年5月までの5年間、鯉淵学園に在籍しましたが、この間最も印象に残ったことは小出満二先生のご逝去でした。そして、後を引き継がれた鞍田純先生も本県のご出身であり、大いに誇りに思つたことです。

さて、この「同窓会支部だより」の発行が決まつたとき、この二人の学園長を中心とした思い出を報告しようと考えて福井さんをお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。

それがいつの間にかこんなに永くなってしまいました。貴重な誌面を独り占めするのは本意ではありませんので、ひとまずこのあたりでピリオドを打つことにいたします。この間に福井さんのご配意に心から感謝を申し上げますとともに、支部会員の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

加藤 整



“あの人は今” 同窓生紹介

今回は、豊岡市の前田豊明さん(28期生)、相生市の釜地秀徳さん(32期生)、丹波篠山市の奥野直之さん(33期生)取材いたしました。

平々凡々と暮らしたい



道の駅神鍋高原「ゆとろぎ」のカフェで

満開になった河津桜の便りが聞こえてくる3月14日、残雪の神鍋高原を眺めながら車を走らせ、豊岡市日高町栃本にお住まいの前田豊明さん(28期生)をお訪ねしました。前田さんと道の駅神鍋高原「ゆとろぎ」に出かけ、カフェで珈琲を飲みながら取材をしました。

地元の同級生2人と入学

まず、鯉淵学園での懐かしい話を伺いました。前田さんは「卒業して45年ほど経ち、記憶が薄れているので当時のことが思い出せない」と言われながら話していただきました。昭和46年に鯉淵学園畜産科(3年制)に入学されました。高校時代の同級生2人(山根さん、高階さん)と一緒に入学されたそうで、非常に心強い気がしたと話されました。寮生活は初めての経験で最初は戸惑いがあったが、徐々に慣れていき楽しく過ごすことができたそうです。特に筑紫寮が学校や食堂から遠く離れていたため学校には行かず、部屋で本を読んでいたこと、そして寮の近くに居酒屋があって夜食を食べによく通ったことなど当時を懐かしく話されていました。

農協では主として畜産業務

鯉淵学園を49年に卒業され、その後は実家に帰り両親とともに野菜、稲、和牛の複合経営を15年間されてきました。その間に家畜人工授精師の資格を取得されました。その後、昭和60年に城崎郡畜連に就職し人工授精師の活動、平成元年からは事務の仕事も担当するようになったそうです。そして農協合併でたじま農協の職員となり、主として畜産業務で活躍されましたが、58歳で役職定年となり農協を退職されました。前田さんは「退職後1年間は、自宅で母親を介護していたが大変であった。ようやく2年目に母親を施設に入所させることができてよかった」と自宅介護の難しさを話されていました。

農業の傍ら子牛市に勤務

現在、前田さんは、30aあまりの田圃でコシヒカリを

栽培し、60aの畑でスイカ、野菜などを栽培しているそうです。このように農業に従事しながら、たじま農協が主催する年9回の子牛市で子牛の体高測定、年3回の子牛の検査、月3日ほど獣医師が行う子牛への注射の補助をしているそうです。

地域の活動では、集落内30aの農地で朝倉山椒を5年ほど前から共同栽培し、その副部長をしておられます。有名な朝倉山椒は昨年250kgの収穫があったそうです。集落の住民(65歳~70歳の約20人)が農作業に従事すれば日当が支給されるので、住民からは小遣い稼ぎになると大変喜ばれているそうです。

趣味はドライブと魚釣り

前田さんの趣味は、ドライブと魚釣りだそうです。「海釣りでは、1日7~8枚ぐらいの釣果があった。冬は鯛、夏はハマチ、カンパチなどを釣りに行く」と笑顔で話されていました。

今後のライフワークなどをお聞きすると、「最近、耳も遠くなりかけ、目も悪くなりかけているので、無理をしないで平々凡々と暮らしたい」と話されていました。前田さん、今後もお元気で活躍されることをお祈りしています。

メロン栽培と土地利用型農業の二足わらじで



自慢のメロンハウスで

初夏を思わせるような陽気の4月22日、相生市矢野町にお住まいの釜地秀徳さん(32期生)をお訪ねしました。車窓から満開の山桜を眺めながら、中国自動車道、山陽自動車道を走り釜地さん宅に着きました。自宅の前で奥様とともに迎えていただき、早速取材をさせていただきました。

辛かったトウモロコシの除草作業

釜地さんは、昭和51年4月に鯉淵学園農業科園芸コース(3年制)に入学されました。しかも、当時、同じ

高校の同級生であった篠山市にお住まいの山本正行さんと一緒に入学されたそうです。特別研究では作物保護を選択し、恩師西村先生の指導でイモチ病を研究されました。また、鞍田先生のゼミにも入り、先生が兵庫県出身の同郷という縁から親しくしていただいたそうです。

入学当初の新入生歓迎大会、肝試し大会、寮歌の練習など厳しかった思い出や、文化祭、ダンス会などの楽しかった思い出なども記憶に残っているそうです。自治会活動では、弘報部と渉外部、そして総会議長団に所属していたそうです。学生時代に辛かった思い出は、「酪農場の圃場に植えたトウモロコシの除草作業だった」と話されていました。

農協ではすべての部門を経験

釜地さんは、昭和54年3月に鯉淵学園を卒業後、医薬品を扱う県内の一般企業に就職し3年間営業の仕事をしたあと、地元の矢野農協に就職されました。農協では最初、販売関係の業務に従事され、その後は金融業務などを経験されました。当時、農協の合併問題が持ち上がったことから釜地さんは、合併事務局員として出向し総務関係を担当されたそうです。そして新農協が発足した後は、総務部・支店・営農経済・共済業務部門などで活躍され、40歳を迎える手前で農協を退職されました。

稲作、小麦、メロン栽培に取り組む

農協で働いていた時には、休日などを利用して80aの自作地で稲作を作っていたことや、専業農家で高所得を得たいという思いから、農協退職後は迷わず農業に取り組むことになったそうです。最初は稲作から始め、農家の減少で小作地が増えたことから、自作地も含めすぐに2~3haの耕作規模になったそうです。しかし、経営規模が大きくなっても、農業だけで生活することができなく、農閑期には農協や一般企業でアルバイトをしていたそうです。

その後、釜地さんは認定農業者として兵庫県稲作経営協議会理事に就任されました。全国認定農業者サミットが兵庫県で開催された時は、ホスト県としてグループ討議のリーダーを経験されたそうです。

現在の経営規模は10haで、稲作(6ha)、小麦(4ha)の土地利用型農業に取り組まれています。特に農協が回転寿司シローと提携していることから、契約栽培農家として米を出荷されているそうです。

釜地さんの農業経営は、稲作、小麦だけでなくメロン栽培にも取り組まれています。自宅から少し離れたところにハウスを4棟設置し、ブランド品の「矢野メロン」を900本栽培され、ネット販売や野菜直売所出荷など多様な方法で販売されているそうです。

地域では数多くの役職に就任

地域社会への貢献活動についてお聞きしました。釜地さんは、地元町内会の自治会長のほか、相生交通安全協

会理事、農業委員会の農地利用最適化推進委員、矢野メロン部会長、森林組合総代、農協総代と支店運営委員など、多くの役職に就任し活躍されています。

趣味については、「最近では忙しくて趣味の海釣りに行っていない。ボートを持っているが保管料だけ支払っている」と苦笑されていました。今後のライフプランは、自動車で全国各地を旅行したいそうです。

二足わらじで、兼業から専業を

母校の鯉淵学園はどんな学校でしたかとお聞きすると「多くの友人、先輩、恩師に出会えた場所」と話されていました。最後に在学生へのメッセージとして「二足わらじがよい。兼業から専業へと進むのがいい」と釜地さんの経験談を話されていました。今後の釜地さんのご活躍をお祈りいたします。

公園管理の業務に一筋



田園を背景に愛犬とともに

風薫る爽やかな気候の令和5年5月8日、丹波篠山市本明谷にお住まいの奥野直之さん(33期生)のご自宅をお訪ねしました。令和時代の初日である5月1日に市名変更した丹波篠山市という看板がとても新鮮に見えました。

楽しかった沖縄での実習

奥野さんは、昭和51年に鯉淵学園農業科園芸コース(3年制)に入学されました。入学された動機をお聞きすると、「高校のクラス担任の先生の奥さん(23期生の井口成子さん)が鯉淵学園の卒業生であり、その先生に紹介された」と話されていました。園芸コースでの特別研究は、丹波篠山の特産である丹波茄子(千両2号)の栽培で、桜井先生から随分指導を受けたそうです。入学して入った寮が新生寮4号室で、ここで初めての寮生活を経験したそうです。寮歌の練習、体育祭の応援練習、「ももや」への食料品の買い出しなど、寮生活特有の厳しい環境の中で、時には故郷を想い家に帰りたい気持ちに駆られながら最初の1年間を過ごしたそうです。自治

会活動では、医療互助部、文化部に入り、寮生活では新生寮の部屋を転々とし、卒業まで新生寮から出ることはなかったそうです。

学生生活の思い出として、「現在、久米島町長の太田治男さんに大変お世話になり、約1か月、昼はサトウキビの収穫に汗を流し、夜にはオリオンビールで水分補給をしたことや初めてのサトウキビはすごく甘かったことを覚えている」と2年生の時の楽しかった実習の話をしていただきました。クラブ活動では、野球部に在籍し、内原町の大会で優勝したことも記憶に残っているそうです。

現在、県立西猪名公園所長として勤務

奥野さんは鯉淵学園を昭和54年4月に卒業し、兵庫県立フラワーセンターに就職されました。センターでは、熱帯温室、ラン室等の温室管理を約3年間行ったあと、センター入園者のニーズにそってスタートした花の売店の担当者として、鉢花の仕入れ、販売に従事されました。その後、園内の植栽、維持管理などを担当され、センターには約30年間在籍されました。平成22年には公益財団法人兵庫県園芸・公園協会本部経営企画課、23年は県立一庫公園、その後24年には花と緑のまちづくりセンター（まちなみガーデンショー担当）に在籍され、現在は県立西猪名公園の所長として勤務されています。

その県立西猪名公園は伊丹空港のすぐそばにあり、着任当時は空港に離着陸する飛行機の騒音が気になったそうですが、6年目を迎えた今はその騒音にも慣れたと話されていました。公園にはテニスコート（12面）、球技場、小さな子供たちが水遊びできるウォーターランドや緑地があるそうです。

集落では生産組合の組合長

地域社会での活動についてもお聞きしました。地元自治会（戸数33戸）では、29年から生産組合委員、昨年は会計を担当され、今年からは組合長として活動されています。奥野さんは「自治会は高齢化が進み、私のような60代でもまだ若手として扱われている」と苦笑いされていました。また、約5反の田圃でコシヒカリ、約2反は黒豆を栽培されているそうです。

奥野さんは、4年前に奥さんとともに地元に戻ってこられました。現在、トイプードル2匹、猫1匹とともに、第2の人生を楽しみながら送られているそうです。また、唯一の趣味を兼ねた楽しみは、「愛車ミニで嫁とドライブをしながら可愛い孫に会いに行くこと」と話されていました。

西村先生に再会し感激

最後に同期会のことを話していただきました。「昨年、60歳を迎えた33期生は、茨城県で同期会を開催し、約60人が参加した。西村先生も元気で参加され、大感激でした」と写真を見せながら話されました。二日目は学園を訪れ、学生寮にも行かれたそうですが、昔過ごした寮

の風景と違って閑散として少し寂しく感じたと話されていました。次回の同期会は、2年後に宮城県で開催されることが決定し、その時を楽しみにされているそうです。今後の奥野さんのご活躍をお祈りいたします。

鯉淵ひょうごの集いを開く



明石海峡大橋をバックにハイチーズ

令和に入って最初の「鯉淵ひょうごの集い」を6月2日、神戸市のシーサイドホテル神戸舞子ビラで開催しました。参加者は予想以上に少ない人数でしたが、久しぶりの再会に大いに盛り上がりました。また、当日は同窓会本部会長の九石 裕氏に参加いただき、学園改革の経過と今後の運営について報告していただきました。

母校の鯉淵学園の再生・存続に向けた取り組みは、昨年12月の本部同窓会報第92号で通知されたところです。また、3月開催された評議委員会並びに理事会で学園の存続運営は、国内鶏卵業界最大手のイセ食品株式会社の経営参画と東京農業大学等の協力を得ることに決定したそうです。

編集後記（令和元年7月）

今回の支部だよりは令和に入り初めてのものです。平成24年に創刊号を発行して14回目となりますが、よく続いていると思います。多忙な町内区長や西脇市あじさい協会会長の仕事をしながら、もう少し支部だよりを続けたいと思っています。会員皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。支部だよりに関するご意見・ご感想をお寄せください。また住所・電話番号・職業等の変更があれば編集者まで必ずご連絡ください。

編集者：福井寛行（26期生）

〒677-0038 兵庫県西脇市大垣内44-2

TEL (FAX) 0795-22-1815 携帯 090-1022-2672

E-mail : hirokei-677@hera.eonet.ne.jp